ゼミナールという活動

『呼び覚まされる霊性の震災学:3.11 生と死のはざまで』著：金菱清(ゼミナール)編

（2016 年　新曜社）

山本 達成

ゼミナールとは一体なんなのであろうか。ほとんどの大学のほとんどの生徒は、”ゼミ”という組織に入り、その中で協力し、ある程度のテーマに沿って行動をしていく。このように漠然としたイメージはあるものの、実際にはどのような活動をしていき、一体なにをもってゼミはゴールを迎えるのか明確にはなっていない者も私を含め多くいることであろう。この本は、その問いの答えを示してくれる。具体的な内容は、東北学院大学のゼミナール生たちによる東日本大震災についての実際のフィールドワーク調査をまとめたもの、である。調査を行う前に、被災により亡くなった一人一人の死に対して、ほとんどが覆い隠されているという問題を明らかにし、そこに彼らは着目し「死者」との向き合い方について調査を通して明らかにしている。

本書は８つの章に分かれており、学生ひとりひとりが１つの章を担当している。よってその内容は、例えば、あるタクシードライバーの遭遇した怪奇現象について、中学校遺族会により設立された慰霊碑について、原発非難区域でイノシシなどの狩猟を続ける捕獲隊とメリットの一切ない中で狩猟をつづけていく理由など、多種多様である。しかし、それらにはやはり”震災”と”命”を関連づけている点で一貫している。

その中でも最もこの本の特徴をあらわしているように思えるものがあった。それは、震災によって実家石巻に住む両親を失った女性に密着をおこなったものである。宮城県に住んでいた彼女は震災の被害も実際にうけ、両親を失ったことからくる精神的苦痛は相当であったものの、最も被害の大きい福島県と比べられることとなる。ボランティアがくることもなければメディアからの情報もほとんどはいることはなく、彼女はそれを社会的孤立であると表現した。そのことから女性は、食事排泄以外の行動をほとんどせず動物同然の生活が続いたという。このように被災者の精神状態がリアルに表現されていることに加え、母親の死体を発見したときには「ボロ雑巾」と化していたなどといった被災当時の”死”も生々しく記されている。ひとつの”死”に目を向け、そこに立ち向かっていく姿はまさにこの本で最も重要視されていることである。

震災による直接な被害をうけることのなかった幸運な私たちが、漠然としかとらえることのなかった”死”を、実際に経験した人々の言葉から考え直し、それを通して震災という脅威の記憶を風化させないためにもとても価値のある本である。そしてなにより、この本を読むことで”ゼミ”という単なる学生の小さな集まりが起こすことのできるものの可能性を感じることができ、我々のようなゼミに属する学生たちにとっての指南書と言っても過言ではない。